

Sincerity⁰⁹

校長 菊田勇雄

神山に近く住みなし破魔矢受く (山口白甫)

年明けは1月5日に自宅がある福島市から相馬に戻りました。すぐに近くの相馬中村神社に初詣に出かけ、生徒諸君と先生方の幸福、相馬高校の発展を祈るとともに、「破魔矢」を購入しました。「破魔矢」はお正月に神社や寺院において、一年の幸運を射止める縁起物、または魔除けとして売られています。現在、校長室のサイドボードに「バボちゃん」と一緒に飾っています。「バボちゃん」はご存じ春高バレーのマスコット人形です。バレーボールに見立てた胴体にまん丸の目玉が二つ付いており、上から手が下から足が飛び出しています。その愛くるしい姿に魅せられ、記念に購入しました。いよいよ令和2年が始まりました。新たな気持ちで学校運営を行います。皆様のご理解とご協力をお願いします。この一年、「破魔矢」を持った「バボちゃん」が相馬高校を見守ってくれるでしょう。



令和2(2020)年1月30日

敗れて悔いなし〜春高バレーの檜舞台で躍動した若駒たち〜

1月6日、武蔵野の森総合スポーツラザにおいて、第72回全日本バレーボール高校選手権大会(春高バレー)の2回戦が行われました。本校バレーボール部は準優勝した強豪の駿台学園と対戦し、善戦しましたが0対2で敗退しました。部員はわずか9名でしたが、県大会決勝では福島商業との稀に見る接戦を制して優勝を果たし、全国大会に駒を進めた戦いぶりは、本県高校バレーボール界の歴史に残る快挙でした。選手諸君のこれまでの健闘を讃えたいと思います。当日は応援団250名余りがバス5台に分乗し、相馬から会場に向かい、精一杯の応援を展開しました。選手諸君には全国大会に出場した経験を財産にして、自分の将来を築いて行くことを期待しています。また、応援した生徒諸君には全国レベルの大会における熱気溢れる雰囲気や華やかな応援から、「何か」を感じ取って欲しいと思います。会場には保護者会やOB会の皆様、同窓生や地域の皆様も多数駆けつけてくれました。紙面を借りまして声援をいただいた皆様に心より感謝申し上げます。私は若駒たちが活躍する姿を目に焼き付けてきました。全国の檜舞台で自分の学校の生徒たちがプレーや応援を通じて躍動する姿を見ることができ、幸福感に満たされました。



小和田毅夫先生のこと

昨年12月26日、天皇后陛下が10月の豪雨により甚大な被害を受けた宮城県の丸森町と本県の本宮市をご訪問されました。両陛下の被災地訪問は、即位後初のことであり、お二人は被害状況をつぶさにご覧になるとともに、被災した方々にお見舞いの言葉をかけられました。両陛下の姿に令和になって皇室が国民に寄り添う存在であり続けることを実感しました。

ところで、皇后陛下の祖父小和田毅夫氏が戦前、旧制相馬中学校で教鞭をとっていたことはご存じでしょうか。大正9年3月に着任した先生は、同13年7月に富山県立砺波中学校に転出するまでの4年4カ月を相馬で過ごしました。着任当時は広島高等師範学校を卒業したばかりの21歳の若さでした。国語、漢文、歴史を担当し、生徒たちと年齢が近いことや、飾らない人柄と熱心な指導から「兄貴先生」と呼ばれ慕われました。大正11年に学校が県内務部長宛てに提出した「教員受持時間二関スル調」によれば、週に国語12時間、歴史6時間、計18時間の授業を担当していました。また、野球部の指導にも情熱を傾け、県下中等学校体育大会では磐城中学や福島中学に勝利するなど校史に残る成績を残しました。下宿先には先生を慕う生徒が頻りにやって来て、一緒にトランプやクイズなどの遊びをしたり、日曜日には銭湯で背中を流し合ったりしました。教え子の中には日本を代表する交通経済学者になった今野源八郎氏がいます。二人の師弟愛は終生続きました。相馬中学の生徒だった今野少年は旧制高校から帝国大学に進学し学問をするという強い希望がありました。しかし、成績は際立って優秀であったわけではありませんでした。先生はこのままでは高校入試の難関を突破できないと心配し、毎日、授業終了後に1対1で受験勉強と一緒に取り組みました。一年間の学習指導の甲斐あって、今野少年は旧制弘前高校文科に入学を果たし、さらに東京帝国大学経済学部に進みました。卒業後、アメリカとドイツへの留学を経て、中央大学・東京大学・弘前大学の教授を歴任し、東大名誉教授にもなりました。また、昭和45年から23年間の長きにわたり馬城会会長を務め、馬城会館を落成させるなど、本校の発展に尽くしました。

小和田先生の二男で外務事務次官や国連大使を務めた恒氏は、平成17年の創立百周年記念講演会において、父親と今野少年の交流を紹介し、教師と生徒の親密な関係の大切さについて語っています。現代に生きる私たちが、二人の師弟愛から学ぶべきことは大きいのではないのでしょうか。旧制相馬中学時代の小和田毅夫先生



若き同窓生の再会

春高バレーの会場において、本校を卒業した若き同窓生が再会するという出来事がありました。その同窓生とは、平成26年度卒業の阿部二千翔さんと荒昂史さんの二人です。阿部さんは現在、福島民友の新聞記者として活躍しており、春高バレーの取材のため会場に来ていました。また、荒さんは現在、近畿日本ツーリストの社員であり、春高バレーの応援バスに添乗員として同行していました。二人は本校在学中同じクラスに所属し、進学先も同じ東北学院大学ということでした。阿部さんには震災後の福島に関する情報を内外に発信するという夢があり、それを実現するため新聞記者を目指しました。一方、荒さんは大学時代に英文学を学びましたが、福島の復興・再生に貢献するという志を実現するため、旅行会社を選びました。春高バレーが縁で二人が再会したわけですが、若い卒業生が生き生きと仕事をし、実社会で活躍する姿に頼もしさを感じました。生徒諸君には将来の働く自分をイメージしながら、高校生活を送って欲しいと思います。



再会した同窓生(左が荒さん、右が阿部さん)

校内授業研究 Part 3

【12/9】馬場藍先生の2年数学Ⅱの授業は、関数の極大・極小を調べてグラフを書き、実数解の個数について考えさせる内容でした。グループ活動を取り入れ、生徒同士に解法を共有させるなど、主体的・対話的な学びを引き出す工夫がなされていました。



【12/11】川岸沙綾先生の1年古典の授業は、『論語』の「為政第二」を読み内容を味わうものでした。生徒たちがグループごとに作成した現代語訳を板書させ修正しながら、正しい訳を理解させるなど、生徒の主体的な活動を引き出す工夫が見られました。



【12/13】鈴木宏志先生の1年世界史Aの授業は、アメリカ独立革命の背景と経過について理解するものでした。グループ活動では生徒たちの多様な発言を受け止め、既習事項と関連させながら学習事項をまとめていくなど、熟練の技が光る授業でした。



【12/16】鶴川さくら先生の3年地理はセンター試験の問題演習に取り組む授業でした。解答プロセスを丁寧に指導する中で、関連事項を補足したり、動画を使って解説を行ったり、随所で工夫が見られました。



〈つづ〉

同窓生列伝⑨ 折笠晴秀 (1885-1965) 続編

～旧制一高における折笠の学生生活について～

旧制第一高等学校における折笠の学生生活は、入学当初から困難なものであったと推測されます。すでに校長通信第2号と第4号でも述べましたが、明治36年9月に入学後、病を得て翌年の秋まで約1年間、郷里の小高で療養生活を送り、また、同38年には父親の晴吉がこの世を去っています。若い折笠にとって健康を書した上に理解者である父親を失ったのですから、どんなにか不安だったでしょう。また、帝国大学への登竜門である旧制一高に入学しながら、学業を中断しなければならなかったのですから、心中穏やかではなかったに違いありません。

折笠の日記や回想がないため、一高時代の生活は詳らかではありませんが、当時の「校友会雑誌」に折笠の名前が出てきます。明治37年12月末から翌年1月初めにかけて実施された野球部の冬季合宿報告に折笠がしばしば登場します。『朝、橋本昌矣、折笠晴秀二氏来訪、又も将棋、雑談に遊び喜しつ、午前中勉強の計画も、第一日よりメチャメチャになりぞ哀れなりける。』『夕、橋本、折笠二氏来訪、到着祝とかにて、豚肉の宴を開く。』『午前、中学校にてテニス、折笠氏も来る。』『昨夜の雨、名残なく晴れて、春日殊にうらかなり、関、折笠二氏を誘ひて一行八人、漁舟を僦て島遊びを催す。』合宿は房総半島の北條町（現在の館山市）で行われ、折笠が宿舎に姿を見せ、打ち解けた様子で野球部の学生達と遊んだり談笑したり宴会を開いたりしています。なぜ弓術部の折笠が房総に滞在していたのか。次の記述が手掛かりになります。『折笠晴秀氏亦病を養て八幡にあり、日々「グラウンド」に來りて成績を記録せらる、権田帰京後、其手を煩はせし事頗る多し、一同に代て深く其勞を感謝し（後略）。』おそらく胸を患った折笠は北條町八幡地区で転地療養し、町内に滞在中の野球部の宿舎を訪ねたのではないかと推測されます。『折笠晴秀氏亦病を養て八幡にあり、日々「グラウンド」に來りて成績を記録せらる、権田帰京後、其手を煩はせし事頗る多し、一同に代て深く其勞を感謝し（後略）。』おそらく胸を患った折笠は北條町八幡地区で転地療養し、町内に滞在中の野球部の宿舎を訪ねたのではないかと推測されます。『折笠晴秀氏亦病を養て八幡にあり、日々「グラウンド」に來りて成績を記録せらる、権田帰京後、其手を煩はせし事頗る多し、一同に代て深く其勞を感謝し（後略）。』

以上のことから、帝国大学進学と立身出世を目指し全国の俊英が集まる旧制一高において、折笠は病氣と父の死を克服して学業に復帰し、部活動や仲間との交流を通じて青春を謳歌した様子を垣間見ることができます。ちなみに折笠と同じ時期に旧制一高に在籍した人物には、文豪の谷崎潤一郎、政治家の鶴見祐輔、文部大臣の安部能成、首相の芦田均、岩波書店創業者の岩波茂雄など、著名人が名を連ねています。



旧制一高の時計台と授業風景（「向陵誌」より）

大学入試センター試験

1月18日・19日、大学入試センター試験が行われました。会場の原町高校には早くから3学年担任、進路指導部、旧3学年担任の先生方が集合し、試験に挑む生徒たちを激励しました。1日目は地歴・公民、国語、英語が、2日目は理科、数学が実施されましたが、大学入試センターは1月24日に中間集計した平均点、最高点、最低点、標準偏差値などを発表しました。大手予備校のデータ分析によれば、数学I・A、英語、国語などが前年より平均点が下がることから、5教科7科目の平均点も20点前後低くなると予想されています。2次試験に向けて、本校3年生には最後まで粘り強く取り組み、合格を勝ち取って欲しいと思います。

1 学年百人一首大会

1月23日、講堂において恒例の1学年百人一首大会が行われました。生徒たちはクラスごとにグループになり、床に並べられた取り札を挟んで対戦相手と対峙し、学年主任の鈴木千尋先生が読み上げる和歌を聴きながら、真剣な表情で取り組んでいました。勝ち上がったチーム同士の熱戦が展開される中、会場は仲間を応援する生徒たちの熱気に包まれていました。大会はトーナメント戦で行われ、1年4組のグループが優勝しました。



模擬選挙が行われました

1月28日、1学年を対象に主権者教育に係る模擬選挙が実施されました。本校の地歴公民科が計画し、相双地方振興局と相馬市選挙管理委員会のご協力を受け、「未来の県知事選挙」を想定して行われました。生徒たちは講堂で政見放送上映会を見て、3名の候補者の主張をそれぞれ聞いた後、書道室に開設された投票所へ移動して投票しました。投票立会人役の生徒が見守る中、生徒たちは実際に選挙で使用されるものと同じ投票用紙、投票記載所、投票箱を使い一票を投じました。生徒たちは本番さながらの模擬選挙を通じて、主権者意識と選挙の大切さを学びました。

